

【7-5-f】

明治以降の郊外住宅地における歴史的建造物の残存状況及び特性

—新潟市西大畑町一帯を対象として—

Distribution and Characteristic of Historic buildings in Suburban residential section from Meiji Era
—A case of Nishiohata district in Niigata city—

高月直也*¹

Naoya TAKATSUKI

岡崎篤行*²

Atsuyuki OKAZAKI

Nishiohata district was materialized suburban residential section from Meiji Era. Although it will be function as an important base of Niigata City, the actual condition about whole historic buildings are not understood. The purpose of this paper is to clarify distribution and characteristic of historic buildings. From this survey, 265 historic buildings are drawn and the percentage of historic buildings is 12% in Nishiohata district. And residence with a European-style building and a semi-detached house equipped with the feature of modern ages are seen.

Keywords Meiji, Modern Ages, Suburban Residential section, Historic Buildings

明治、近代、郊外住宅地、歴史的建造物

1 研究の背景と目的

近年、新潟市西大畑町一帯は、大正期の洋館付住宅である市長公舎や副知事公舎の保全・活用に向けた動きがあり、新潟市におけるまちづくりの重点地区に位置づけられている。しかし、このように歴史的環境を生かしたまちづくりや景観整備などが行われようとしているが、西大畑町一帯における研究は洋館付住宅のみに特化した研究¹⁾と景観形成手法に関する研究²⁾しか行われておらず、歴史的建造物¹⁾の全体像は明らかとなっていない。また全国的に言われる近代期の郊外住宅地は、いわゆるニュータウン開発であり、鉄道沿線や土地区画整理事業、資本家による開発が主であるが、西大畑町一帯は近世期の町割りを持った旧新潟町からの拡大により成立していることから、特異的な郊外住宅地であり、学術的観点からもその全体像を把握することは重要であると考えられる。そこで本研究では①外観より歴史的建造物と推定される建造物の残存状況及び②特性を明らかにすることを研究の目的とする。

2 対象地概要及び研究方法

新潟市西大畑町一帯は明治以降、学校や病院などの施設が整備されたことにより、良好な居住環境を求めた市内外の豪農や富豪の屋敷が建ち並ぶ郊外住宅地であった。また大正・昭和期にかけて、新潟市の近代化は大きく進行し、職種も多様化していく中、中流階級の人々の住居も建てられるようになった。これらの住居は洋館付住宅などの和洋折衷住宅や近代期の特徴を備えた住居で、近世期の町並みとは異なる特徴的な景観を形成している。調査対象地は新潟市の中心地から西側に位置する西大畑町一帯を対象とし、東中通以西・岡本小路以北の全25町丁を対象とする。研究方法として①古地図による街路変遷の把握から対象地における開発経緯・歴史的背景による地区割をし、②対象地において全建造物の悉皆調査を行い、外観及びヒアリングより歴史的建造物と推定される建造物を抽出する。③抽出した歴史的建造物に関して、配置や意匠、形態などに関する項目を調査し、その結果から歴史的建造物の類型と特性を分析・考察する。

*1 富山市役所

*2 新潟大学工学部建設学科・助教授(工博)

Toyama City Hall

Assoc.Prof., Dept. of Civil and Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

3 西大畑町一帯における開発経緯及び街路変遷

享和元年(1801)、明治10年(1877)、明治34年(1901)、大正6年(1916)、大正14年(1924)、昭和11年(1936)、現在までの7段階において各年代ごとの地図を基に街路変遷を考察した。享和元年には寄居道と南北の街路が形成され、街路の交差する場所に寄居村があったことから、寄居町一帯が最も早く開発されたと考えられる。(図1)また明治34年には東中通沿いと西大畑町辺りの街路が形成され、豪農・富豪の屋敷地としての宅地開発が行われてい

た。(図2)大正14年には田中町や二葉町、水道町辺りの街路が形成されている。大正期には新潟市において市外から多くの人口が流入し、西大畑町一帯に住居を構えたことから、これらの人々の住宅地として大きく拡大していったものと考えられる。(図3)

以上より、西大畑町一帯における開発経緯は①近世期の寄居村②明治期の屋敷地開発③大正・昭和期の住居開発の3つに分類されると考えられ、街路変遷と共に考察し、西大畑町一帯を8つの地区に分類した。(図4)

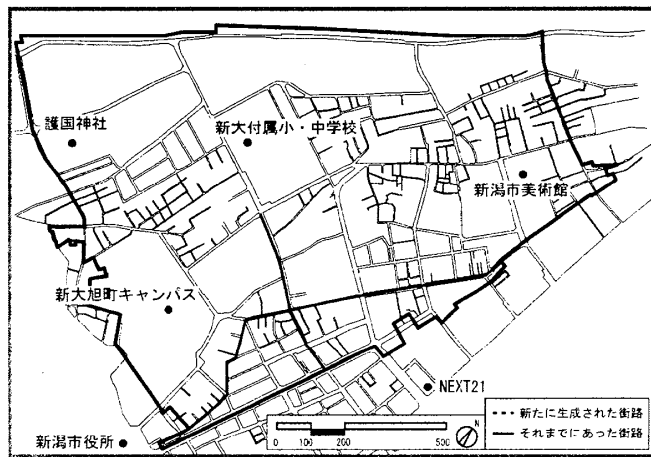


図1 享和元年(1801)時の街路

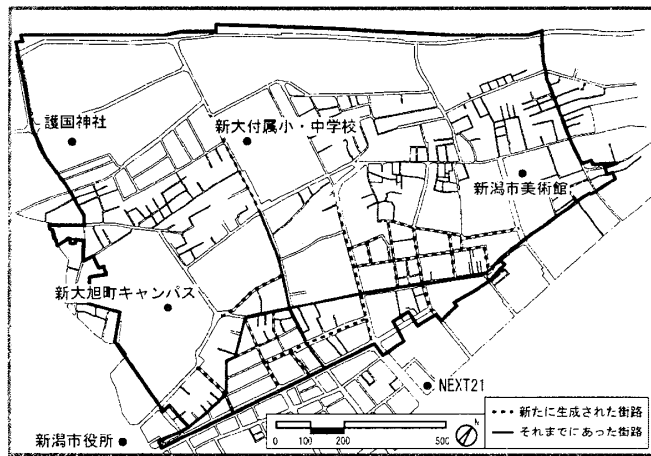


図2 明治34年(1901)時の街路

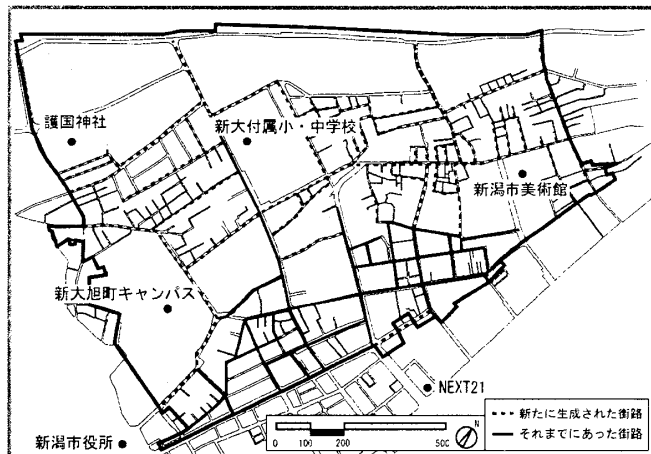


図3 大正14年(1924)時の街路

4 歴史的建造物の残存状況

西大畑町一帯において、全建造物2155棟を調査し、歴史的建造物265棟を確認した。残存率⁽²⁾は全体で12%、主屋残存率⁽³⁾は11%となった。主屋残存率は寄居町地区で17%と最も高く、次いで西大畑町地区の15%、東大畑地区の13%と続く。海岸地区に向かうにつれて主屋残存率が低くなっていることが分かり、街路形成時期の早かった地区ほど歴史的建造物が良く残っていることが分かる。また残存棟数を見ると最も多いのは西大畑町地区の47棟、次いで田中町地区の39棟、旭町・水道町地区の38棟、東大畑地区の34棟となっている。(表1・図4) 主屋残存率及び残存棟数の観点から、西大畑町地区・東大畑地区・寄居町地区が重要な地区であると考えられる。

表1 地区別内訳

No.	地区名	主要街路形成	建物数	歴史的建造物		残存率	主屋残存率
				主屋数	その他		
1	寄居町地区	近世	192(23)	28	5	17%	17%
2	東中通地区	明治初期	235(16)	24	5	12%	11%
3	東大畑地区	明治末期	267(13)	34	8	16%	13%
4	田中町地区	大正初期	350(7)	39	1	11%	11%
5	西大畑町地区	大正初期	334(14)	47	8	16%	15%
6	二葉町地区	大正末期	277(9)	23	2	9%	9%
7	旭町・水道町地区	大正末期	496(5)	38	2	7%	7%
8	海岸地区	昭和初期	4(2)	0	1	25%	0%
合計			2155(87)	233	32	12%	11%

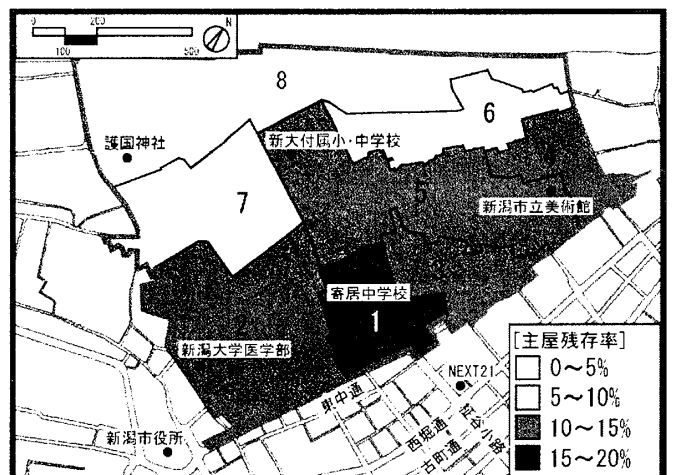


図4 地区別主屋残存率

5 歴史的建造物の特性

5-1 建築形態

歴史的建造物の特性を捉えるために用途、利用、様式、建築形態から分類を行い、住居・店舗に関して9通りに分類した。戸建においては伝統和風と近代和風がほぼ同じ割合を占め、長屋も含めると和風様式が全体の約85%を占めている。また洋風様式は全体の約15%を占めている。最も多い建築形態は近代和風(87棟・図9)で、次いで町屋(43棟・図7)、裏町屋(35棟・図8)と続く。しかし洋館付住宅(13棟・図11)や近代洋風(17棟・図13)、準戸建長屋(17棟・図14)、公共建築、蔵、寺社・教会などの形態も見られ、多種多様であると言える。地区別の建築形態の分布を見ると、大半の地区で近代和風が最も多い形態となっているが、寄居町地区においては町屋が全体の約40%を占め、町屋が良く残されている地区であると言える。また大規模な土地買収の行われた田中町地区、旭町・水道町地区では準戸建長屋の占める割合が高い。西大畑町地区では裏町屋がよく見られ、洋館付住宅が最もよく残されている地区である。また二葉町地区では洋風市営住宅が残っているため、近代洋風が多くなっている。市街化の遅かった旭町・水道町地区や二葉町地区など、海岸地区に

向かうほど伝統和風の占める割合が低くなり、時代の進行と共に戸建性の高い住居が定着していったことが分かる。(表2・図5・図6)

表2 建築形態分類別棟数

用途	利用	様式	建築形態
住宅・店舗(233)	戸建(203)	伝統和風(78)	町屋(43/18%) 裏町屋(35/15%)
		近代和風(87/37%)	
		和洋折衷(21)	一部洋風住宅(7/3%) 洋館付住宅(13/6%) 和洋館並列住宅(1/0.5%)
		近代洋風(17/7%)	
	長屋(30)	準戸建長屋(17/7%) 連戸長屋(13/6%)	
	公共建築(1)		
蔵(23)			
寺社・教会(8)			

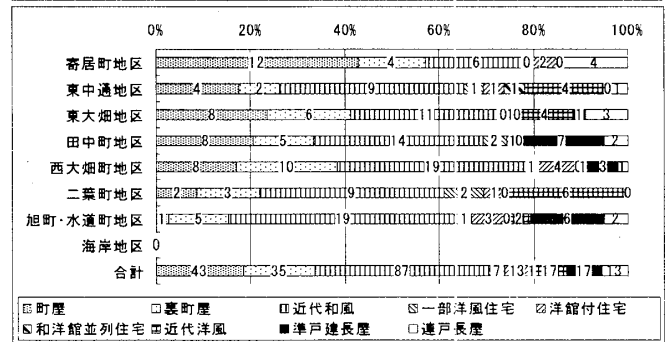


図5 地区別建築形態分布

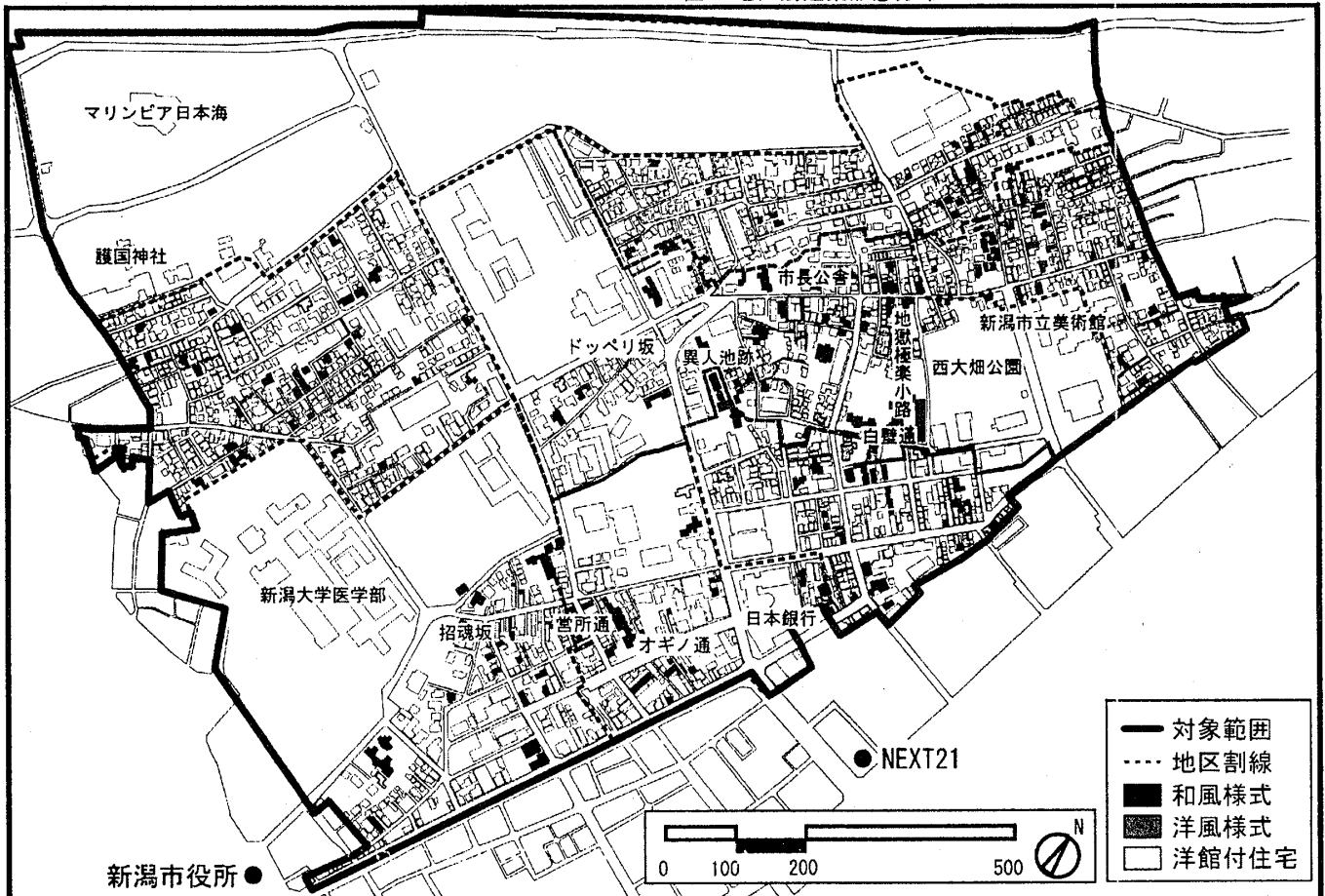


図6 歴史的建造物分布図

5-2 歴建洋風率

対象地内で洋風要素を持つ歴史的建造物を41棟確認し、歴建洋風率(4)は対象地全体で15%となった。新潟市下町における歴建洋風率が1%であること³⁾を考慮するとより洋風要素の強く残る地域であると言える。さらに地区別の歴建洋風率を図7に図示した。二葉町地区で36%と最も高く、次いで東中通地区の28%、西大畑町地区の19%と続く。これは大正末期に建設された洋風市営住宅や昭和初期に建設された洋風建築によるものである。

5-3 配置形態

次に配置形態と建築形態の3×3配置形態分類図を表3に示す。全体として後退・接隣が多く、次いで接道・接隣、非接道・非接隣と続く。後退・接隣の配置形態では、切妻玄関を持ったり、前面に庭などを持つ近代期の特徴的な住居が多く、近代和風や和洋折衷などの非接道・非接隣の配置をとる戸建性の高い住居以外でも、裏町屋や準戸建長屋といった借家形態の住居において後退・接隣が最も多く、戸建性を重視した造りがなされていることが分かる。

6 結論

- (1) 対象地を近世から昭和初期にかけての開発経緯及び歴史的背景、古地図を参照とした街路形成時期により8つの地区に分類した。
- (2) 全棟数2155棟を調査し、歴史的建造物265棟を確認した。全体の残存率は12%、主屋残存率は11%となった。主屋残存率が最も高い地区は寄居町地区であり、旧新潟町に近い地区ほど主屋残存率が高くなっている。また残存状況及び残存棟数の観点から、西大畑町地区・東大畑地区・寄居町地区が重要な地区であると考えられる。
- (3) 歴史的建造物を町屋、裏町屋、近代和風、一部洋風住宅(図10)、洋館付住宅、和洋館並列住宅(図12)、近代洋風、準戸建長屋、連戸長屋の9通りに分類した。近代和風が大半を占め、伝統和風と合わせると、和風様式が大半であるが、洋風様式は全体の15%を占め、下町と比較するとよく残存し、洋風要素の強く残る地域であると言える。
- (4) 接道・接隣条件から8通りの配置形態を抽出した。後退・接隣の配置形態が最も多く、準戸建長屋は前庭と切妻玄関を持つ近代の特徴的な住居形態である。また街路形成の遅い地区では伝統和風の占める割合が低く、非接道・非接隣の配置をとる戸建性の高い住居が定着していったことが伺える。

表3 地区別建築形態分布

	接隣				半接隣				非接隣					
	町屋	裏町屋	近代和風	和洋折衷	近代洋風	準戸建長屋	連戸長屋	町屋	裏町屋	近代和風	和洋折衷	近代洋風	準戸建長屋	連戸長屋
接道	29(87%)	11(31%)	9(10%)	0	0	0	0	0	0	1(1%)	1(5%)	0	0	0
	58(26%)				0					2(1%)				
後退	11(26%)	22(63%)	17(19%)	4(20%)	1(2%)	1(3%)	12(14%)	2(10%)	1(6%)	0	0	0	0	0
	81(36%)				17(7%)					1(0.5%)				
非接道	2(5%)	1(3%)	6(7%)	1(5%)	0	0	0	3(3%)	0	38(43%)	10(50%)	9(53%)	0	0
	10(4%)				6(3%)					51(22%)				

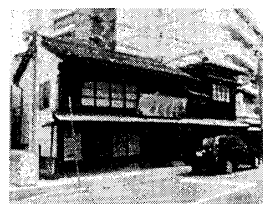


図7 町屋



図8 裏町屋

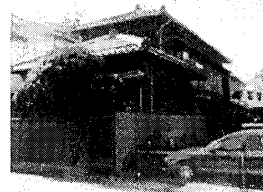


図9 近代和風



図10 一部洋風住宅



図11 洋館付住宅



図12 和洋館並列住宅



図13 近代洋風

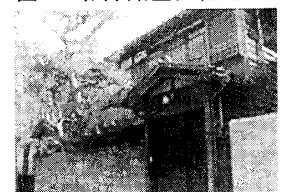


図14 準戸建長屋

【補注】

- (1) 「第二次大戦以前に建てられた建造物」と定義する。
- (2) 全建造物に占める歴史的建造物の割合
- (3) 全主屋棟数に占める歴史的建造物の主屋棟数の割合
- (4) 全歴史的建造物棟数に占める洋風要素を持つ歴史的建造物の割合

【参考文献】

- 1) 今井亜也子, 昭和初期の新興住宅地開発と洋館付住宅 ~新潟市関屋松波町を中心として~, 新潟大学工学部建設学科卒業論文, 2003
- 2) 山下真・西村伸也, 新潟市西大畑地区における景観形成手法の研究, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 1996. 7, p410-413
- 3) 岡田雅行・岡崎篤行, 歴史的建造物の外観からみる地区特性 - 新潟市下町・下本町市場周辺を対象として -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 分冊, 2003, pp213-214